

全日本医師剣道連盟報



第 27 号

平成 30 年 2 月

全日本医師剣道連盟

事務局 〒305-0044 茨城県つくば市並木 3-23-25

林 明人 TEL & FAX: 029-855-7446

info@japan-medical-kendo.jp

ご案内

第 53 回全日本医師剣道大会（いわて大会）



皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平成 30 年 4 月 14 日(土) 15 日(日)に岩手県北上市に於きまして「第 53 回全日本医師剣道大会 いざ、いわて北上大会」を開催する運びとなりました。岩手での開催は平成 9 年、中村好和先生が大会会長をされて以来 2 度目になります。

今回開催の北上市は平成 28 年に行われました「希望郷いわて国体」の主会場です。今大会では国体優勝選手の方々や県内の八段の先生にも参加をお願いしております。大会形式は、審査形式立会い、地区別団体戦、個人戦の他、高知大会で好評だった廻り稽古や自由稽

古で交剣知愛を深めて頂きたい。

また、大会期間中には、岩手ゆかりの偉人である新渡戸稲造の「武士道」精神を伝えるパネル展示や上映会を企画しています。

岩手県は山、海と雄大な大自然に囲まれた国内最大級の広大で肥沃な県土であり、岩手県最高峰で南部片富士とも呼ばれる「岩手山」をはじめとする奥羽山系・北上山系の美しい山々が見られ、「八幡平」、「花巻」など旅の疲れを癒してくれる温泉郷が数多くあります。沿岸部にはリアス式海岸で有名な「陸中海岸国立公園」など壮大な海の景観が見られます。新鮮な魚介類が豊富であり、「あまちゃん」により有名になりました三陸鉄道からは美しいリアス式海岸がご覧頂けます。また、世界遺産である中尊寺金色堂を有する「平泉の文化遺産」並びに橋野鉄鉱山を含む「明治日本の産業革命遺産」は観光スポットとして人気があります。ぜひ、岩手観光をお楽しみください。

東日本震災時には多くの先生方からご心配のお声と多大なるご支援を頂きました。今度は、私たちが真心こもったおもてなしで感謝の気持ちをお伝えしたいと思っております。

皆様方の御来県、心よりお待ち申し上げます。

第 53 回全日本医師剣道大会（いわて大会）

大会会長 菅 義行

実行委員長 川上 格

第 53 回全日本医師剣道大会 いざ いわて北上大会

開催日時	平成 30 年 4 月 14 日（土）、15 日（日）
開催場所	北上総合体育館 〒024-0051 北上市相去町高前檀 27-36 TEL 0197-67-6720
宿泊並びに懇親会場	ホテルシティプラザ北上 〒024-0032 北上市川岸 1-14-1 TEL 0197-64-0001
大会参加費	20000 円
懇親会費	12000 円（同伴者 8000 円）（要事前申込）
二次会費	3000 円

写真：悠然と流れる北上川の河畔にある北上展勝地は、東北有数の桜の名所として知られ、「さくらの名所 100 選」「みちのく三大桜名所」に数えられています。珊瑚橋から 2 キロにわたる桜



並木の他にも、約 150 種の様々な桜が、展勝地公園内 293ha に 1 万本あると言われ、4 月中旬ごろに咲き始めるソメイヨシノから 5 月上旬のカスミザクラまで美しさを競います。

写真：岩手県北上市に古くから伝承され続けている民俗芸能「鬼剣舞（おにけんぱい）」。「鬼剣舞」とは念仏剣舞のひとつで、頭や腰を巧みに動かしながら華麗に踊ります。いかめしい面を付けて踊ることから、一般的に

「鬼剣舞」と呼ばれていますが、鬼ではなく、仏の化身であり、面には角がないのが特徴です。現在、北上市の鬼剣舞団体として 12 団体が活動していますが、その中の岩崎鬼剣舞と滑田鬼剣舞は国の重要無形民俗文化財に指定されています。



大会日程

平成 30 年 4 月 14 日（土）

12:00 受付
13:00 開会式 演武
14:00 八段模範試合
14:30 審査形式立合い
16:00 廻り稽古・自由稽古
18:00 幹事会
19:15 懇親会

平成 30 年 4 月 15 日（日）

8:00 自由稽古
8:45 記念撮影
9:00 地区別団体戦
11:30 昼食
12:30 個人戦
14:00 閉会式

大会事務局 全日本医師剣道連盟 岩手県事務局
〒024-0071 岩手県北上市江釣子 16-51-2
ishikendo.iwate@gmail.com

大会会長	菅 義行	携帯:090-8785-5684
実行委員長	川上 格	携帯:090-3360-6292

第 53 回全日本医師剣道大会（いわて大会）を迎えて



全日本医師剣道連盟

会長 大柵廣伸

わざわざ行こう高知大会と銘打った第 52 回全日本医師剣道大会（高知大会）開催から早いもので約 10 ヶ月が経過し、第 53 回全日本医師剣道大会（いわて大会）まで残すところ約 2 ヶ月となりました。記憶を辿りますと岩手での開催は、平成 9 年中村好和先生が大会長をされた第 32 回全日本医師剣道大会以来 2 回目となります。

また昭和 34 年全日本医師剣道連盟が誕生してから今大会で 59 年目を迎えます。

岩手県は、『武士道』を外国人向けに英語で記し又国際連盟事務次長を歴任された新渡戸稲造の出身地です。新渡戸稲造が記した『武士道』から学ぶ事柄は沢山有り、改めて今大会でその事柄に直に触れる事が出来る喜びがあります。医師剣道連盟の先人が求め築き上げてきた“求める精神”或いは“確かめ合う技術”をお互いに尊重仕合う大会になって戴きたいと思います。

大会終了後は、岩手県最高峰岩手山をはじめとする奥羽山系・北上山系の美しい山々や世界遺産中尊寺金色堂を有する平泉の文化遺産或いはリアス式海岸で有名な陸中海岸国立公園を旅するのも大変楽しみです。

末筆になりましたが、岩手県で約 20 年振りに行われる第 53 回全日本医師剣道大会（いわて大会）会長菅義行先生並びに実行委員長川上格先生を始めとする岩手県医師剣道連盟の先生方の大会開催のご尽力に対しまして深く感謝の意を表します。

合掌

生涯剣道

全日本高齢剣友会

名誉会長 高崎 慶男



プロフィール

大正十二年一月十六日生 （九十五歳）
十歳より高浜小学校鈴木進先生の手ほどきで竹刀を握る
石岡農学校卒（現：石岡一高）
高浜小学校教員拝命
兵役に服す 陸軍少尉 北支那の戦野で九死に一生を得る
（株）関東銀行（現：筑波銀行）に入行し潮来、江戸崎、古河支店長を経て、本店庶務部長、取締役業務部長、 経理部長、本店営業部長を経て、退任する
元茨城県剣道連盟部区会長、現相談役
元全日本高齢剣友会長、現名誉会長
剣道八段 七十四歳にて合格
剣道範士 八十四歳にて授与
文部科学大臣表彰（剣道の普及振興による）
全日本剣道連盟より剣道有功賞拝受
全日本剣道連盟より剣道功労賞拝受



竹刀を握り始めてから八十五年たちました。紆余曲折はありましたが、よくぞ飽きずに続いたと思います。竹刀から学んだ素養は息の長い営みの中で試行錯誤しながら体幹に深く蓄えられたものがあります。一筋縄でない得心の技を追い求めてそこにかもしだす人間模様は計り知れないものですが、剣縁という切磋琢磨がもたらす情感（思いやり）みたいなものがうずまきます。高齢化社会の到来になり生涯云々という言葉が聞かれるようになり、剣道界にもご多分に洩れずその波が押しよせる現象は明らかであります。生涯剣道について語れとの名題を頂きましたが、私は未経験の最中でありますが、その一端にふれさせて頂きます。

活人剣を提唱する大先輩の石原忠美範士は生涯剣道とは老後の剣道の工夫だと申されております。具体的には第一には健康維持の大前提で次に無駄打を省略する、即ち、自分の持っている調整力をうまく使うことです。そして気攻め、抑える、弱いところを見せない工夫で、いわば俳句のようなもので百文字使って表現したいものを十七文字に表わす、そして見る人読む人に余韻を残し、感動を与えるものだとの持論です。前の東京都剣道連盟の会長だった伊藤元明先生は医剣宗一途という冊子の中で剣道美学にふれられている。「正確さ、滑らかさ、律動、拍子、そして調和」があれば美しく見える。だがこの美学は夫々個々様々であってこれだというものでない、皆違っていい、それが理にかなない善なるものとして映るものであれば美学として審判三人が一斉に手をあげるのではないでしようかと問いかけています。そしてヒポクラテスの論しの言葉「生命は短い」「技術は長い」剣道に終りはない、奥には奥の世界があると修行の求め方にふれて、「打つ機会」の判断は難しい、私達医療の世界での診断、判断も同様に軽々しいものでない。そして人間は死に向って成長するものだとも知見を述べておられます。

一〇四歳になられる異色の線墨書家の篠田桃紅さんは「一〇三歳になってわかったこと」の冊子で、歳をとって失うものもあるが歳をとらねばわからなかったことがある、若い時は客観視しているつもりでも自分がその渦中にあるので限度がある、歳をとるにつれ自分や他人を見る目の高さが上がってきますと桃紅さんは感覚を磨くこと、そして感覚は頭で学ぶことも大切だが体感とし勘を磨くことが大切だと力説している。先賢の言い分を時に学ぶ気持で引用させて頂きました。お三方の求めているものは生涯剣道をたしなむものにとって大事な示唆であると思います。

◆ 静 極 発 動
せいきわまればどうにはっす

日体大の山内富雄範士の書かれた「剣談」の中で「静極発動」に心打たれ、機を見て打つは感覚（感知）を磨くこととしかと受けとめました。そして“攻め勝って乗り、溜めて割って入る面”を未熟な我流の課題としました。つまり、自分充分という体勢を（立ち上がり、触刀、交刀の攻め）溜めて、相手を読み打つべき時を感得（感知）する感覚を体に覚えさせて（相手とのやりとりの間に醸成される雰囲気いわゆる合気）意識づけ、心が形に見えるという醍醐味を体幹への試し方としました。攻めの極意は向こうからこっちへ向ってくるよう攻めることだと言われている。その攻めの構えに左足の爪先を内側に入れる（ひかがみが伸び腰が入る）、乗るは相手の剣先を見下ろす（自分を冷静に高める）、次に重心を前に移す（相手に威圧感を与える）等瞬時の備えだが、中々、隙、気配の察知は難しいものです。自分充分と攻めがきいたと信じたら相手の竹刀をしごきながら体全体を前に移し思い切って面にいくのです。所謂、出頭面なのです。“一瞬の先”にかけてみることです。私の選択肢なのです。

◆ ままならぬ

定めた位置に振り下ろす、それだけのことなのにままならない。国見修二さんの剣道詩集みちすがらの一節である。単純そして複雑思考、竹刀の培う価値感の世界なのだと思います。先の篠田桃紅さんは「思うとおりにいかない。それが面白いんです。いつでも賭けなんです。だからやめられないんですね」と打つと書くことの違いはあっても習い事は皆こうなのだと納得の外ない。

◆ 人生二毛作

一足飛びに九十歳になったわけでない。長い時間での喜怒哀楽の葛藤にさまよいながら、わだかまりの「カルテ」に頼ったりしてやっと開放されつつある人生八十年の幕開けという端境を体験中なのです。一仕事終った第一の人生とは趣を変え、むしろ第一幕をしのぐほどの楽しさと充実感に満ちた第二幕は人生の二毛作であり、第一の人生は少し物足りなかったと思えばチャンスきたるわけである。感じるという五感を失っては面白くも楽しくもない。



◆ 年だから

という言葉は八十五歳になったら使っても良いという人がいた。何故だろう。簡単な理屈である。寿命が十年延びているので今の後期高齢者の入口になったのです。だから八十五歳までは絶対年だからといって言い訳をしてはいけないと心の中に持つことが肝要である。人間には歳相応の自立が求められている。特に高齢社会になった今、私達に求められている自立の心構えは尚更のことである。だが自立は独りで生きていることでない、孤独でない。自立している人とは適切な依存ができてそのことをよく自覚している人なのだという。

◆ 新鮮な老い

外山滋比古さんの著書「老いの整理学」にたいへんうまいこと教えられることが書かれており、手にとるように解る。例えば“ホメられるススめ”の中で自分をホメてくれる人を持ちなさいと。そういう人によって老いの身にも喜びを味わえる。夫々の違った人生を歩んだ人のホメ方には自分の知っていることを話す、ほかの人は知らない、相手の知っていることはこちらは不案内。それがいいのです。

◆ 花

もの言わぬ友の中で花は自分で育ててみることだ。“タネを蒔け”朝顔は野生豊かでたくましく“これから咲くよ”という生活力みたいなものを感じる。ほかの花が終ってしまっても秋風が吹き始めるころでも朝顔であり、私も毎年ながめています。

◆ いぶし銀

たいへんな代物です。ある人間の生き方（男の一生）二十代は志高く三十代は仕事に燃え四十代は功をあせらず五十代は寛容をもって六十代は引き際よく七十代は時を選び八十代は自由を楽しみ、そしてそれからはいぶし銀のように幽玄の境であつた。さて、私のいぶし銀とは何だろう。這えばたて、たてば歩めの親心。親思う心にまさる親心、そして我逢う人から受けた大恩を忘れず謙虚に実る程頭の下がる稲穂かな。かけがいのない仲間とせめぎ合いの稽古で私の先を逆に眞当に先を取られることがある。敗北感より嬉しさがこみあがる仏心かなあ。

◆ 一打一会

あの「バカの壁」の作者、養老孟司さんの“まともな人”の中に生きることが再び取返しのつかない時間を通してであり、二度と同一の状態をとることはない。だからすべて一期一会なのであると。全く同感です。ですから息の長い剣道にあやかる私達は前述の省略、調和、感覚を体幹に磨きをかけることによってひらめきという剣道勘のレベルが高まるのではないかと期待しております。豊かな時間があり人生の喜怒哀楽を体験、そして人生で一仕事を終えた方々に新たな挑戦をして頂きたいと念願して止まない。“夢人生に現わす”楽しみがふくらむことと思います。一打一会の旅に終着駅はない。

◆ 剣道功労賞

去る十一月三日に私は全日本剣道連盟から剣道功労賞授賞の栄に浴しました。有難い極みであります。千鶴萬里心（老いた鶴だが千里の空を飛ぶ意欲を持っている）を肝に銘じて気ばらず胸中におさめて、余生をご恩返し生涯剣道を全うしたいと念じております。拙稿を終ります。



功労賞のお祝いの会 平成 30 年 1 月 16 日上野の東天紅にて

剣道の相気と呼吸法

湯村正仁



もう、27年前になるが、剣道八段を受審した時のことである。二次審査二人目が終わった時には意識が朦朧としていて、自分の竹刀袋を置いた場所さえわからなかった。それに続いて行われる剣道形、学科試験については何も覚えていない。結果は合格であったが、それほどにハードな1日であった。

私は、審査の場では直前の立ち合いが始まると同時に息を吐きはじめ、自分の番ではそのままの呼吸の連続で立合っていた。途中の息継ぎは意識がない。ここにくるまで、1年間の準備があった。その中に、朝5時起き、30分の座禅があった。白隠禅師の夜船閑話を熟読し長呼吸丹田呼吸の訓練を積んできた。立合いに入るとただ相手の呼吸に合わせるだけであった。呼吸を合わせていれば相手の呼吸がわかり、呼吸の変化するところがわかるのでここに打ちを出す。ところが相手も同じ呼吸で臨んでいるので二人が同時に打ちを出すという結果であった。これすなわち、相打ちである。特に二人目の終了間際の最後の一打ちは見事な相面であったことを覚えている。審査の結果発表の後、審査員の一人から「あの一本がなければ落第であった」との講評をいただいた。

今回表記のテーマをいただき、この難題に応えるにここに記した「最後の一本の打ち」をどのように解釈するかということから始める。相打ちか、相抜けかという問題である。

無住心剣の流祖、針谷夕雲はこのような相打ちは「畜生兵法」といって罵倒している。

武道は切るか切られるか、打つか打たれるか、生きるか死ぬか、勝つか負けるか、敵か味方か、すべて二律背反の中にあって決断を下さなければならないのが剣道である。生きるためには緊張があり、真剣であり二人が打ち合って生死をかけるならそれは「相打ち」である。生死をかけた剣道であるが二人とも「死」であってはならない。二人とも「生」の道を求めるのが人間としての剣道でなければならない。それが「相抜け」であり、そこには天と地ほどの違いがある。

さて、問題の最後の相面は「相打ち」なのか「相抜け」なのか？

結果としての形は針谷夕雲にいわせると「相打ち」で犬畜生の喧嘩と同じで

ある。しかし、あの場は試合でなく昇段試験の審査の場であるから、「相抜け」といってよいのではなかろうか？ 打たなければ二人とも審査に失敗しているぎりぎりの場面であった。すでに意識は敵味方、勝ち負けを離れた無意識の世界に入っていた。後日、相手の I 氏と話したとき、彼も全く同じ状態であったということである。すでに時間の観念も、審査という特殊な場の観念も、勝ち負け・合格不合格の観念もなく向かい合う二人が申し合わせたように同時に打ちを発し、直後に時間が終了したのであった。まさに二人の呼吸が、というより生命の波長がぴたりと合っていたと思う。ともに生きるためには、合格するためには打たなければならない一打であったのだ。これぞ「相抜け」といってよいと思っている。

この二つの違いについて針谷夕雲の説明を見よう。以下、大森曹玄著「剣と禅—無住心剣」から拾ってみる。

禅語に「八識田中に一刀を下す」という言葉があるが、あらゆる想念の起こる根源である第八識と呼ぶ潜在的な無意識層すら断ち切って、分別相対の境を完全に脱却し、能動的に自らの命を生きなければならない。対立的な生死が自覚的なものになるとき、それは対立を超えた超生死、あるいは無生死となることができる。それは自己保存の本能とは一見反対の方法、自己を否定することによってかえって自己を超えた大きな自己、根源的な自己に生きる道である。

相打ちには微細ながらも依然たる人間の根づよい煩悩、勝敗二元の分別が働いていると見たのである。「両方立ち向かって平気で相争うものがない」のが「相抜け」であり、至高の位であるとしている。

生死をかけた幾多の勝負を勝ち抜いた古の剣者が、勝敗、闘争を極点まで突き詰めていくと、かえって勝敗を超えた闘争のない絶対自由な平和の世界に出ることを実証し、記載してきたのである。(要旨抜粋)

私がここに至るまでの過程を考えるには佚斎樗山子(いつさいちょざんし)著「猫の妙術」が参考になる。

- ① 鋭き黒猫 技巧派で腕自慢、技には絶対の自信がある(技)
- ② 虎毛の大猫 氣勢で相手をねじ伏せることができる(氣)
- ③ 灰色の大猫 心を練り、常に心の和をもって対する(心)

この3匹の猫は勝軒先生の家にも食う暴れ鼠を捉えることができなかった。そこに登場したのがのろのろとした古猫である。この古猫登場するなりあっさり大鼠を退治したという話である。

八段を受審するほどの腕なら、すでに心技体出来上がっているはずである。これを結びつける要は「氣」である。

氣とは、孟子が「志は氣の師なり、氣は体の充なり」といっているように、

心を載せて働く一種のエネルギーと解し、形なく重さもない心と、形あり重さもある体とを媒介する力である。ここに書かれているように養気には高い志がなければならない。私は勤務していた病院の全面改築が控えていた。その作業に入れば剣道に費やす時間と勢力の余裕はなくなる。それ故、「八段受審はこの1回きり」という固い決意のもとに、私の実力ではとうてい無理と思っていた八段を受審したのである。時間が制限されたなかで、高い志と高い目標に向かうことが気力の充実の原動力であった。

精神的な面から気を養うためには、志を高く持ち、顧みてやましくない道義的生活をすることが第一の要件である。日常つねに道義にかなうような生き方をして、純熟していかなければ天地に充滿するような活気は養われない。

日常生活あらゆる場面で姿勢を正し、丹田に呼吸を溜めて、活気を五体にみなぎらせることが肝要である。私は白隠禅師の長呼吸丹田呼吸を我流ながら毎朝の日課とすることによって、いつの間にか気が養われ呼吸を意識しなくなっていた。

こうして心技体が整い、気が充実してゆるみなく、自然に緊張が持続するようになると表面的な気張りや濁りは沈下して見られなくなる。仁王三昧の慄然とした気魄が人を圧するようになる。こうなると心気渾然としてしかもこれを超脱する。気を練ってここに至れば心気が一つに溶け合って自由の天地に逍遙し、気技一致して自在の妙技を発揮することができる。猫族会議の議長を務めた「古猫」のレベルである。

猫の妙術」にはまだ先がある。勝軒先生の隣村にいた一匹の「居眠り猫」の話に続く。

この猫のいる村には一匹の鼠もいないという話である。

この「居眠り猫」の心境は森羅万象をあるがままに見、万事を超越した段階である。

第1、第2の猫は対立する2者がある二律背反で、第3の「灰色の猫」になって二律背反から抜け出る。「古猫」に至ってようやく二律一致し敵も味方もない心境となる。次いで「居眠り猫」の段階では二律を超越して、我もなければ敵もなしという。形あるものはことごとく相対的であり、自分の心に固定的なとらわれ、つまり象がなければ対するものがなくなるのである。山岡鉄舟は「人境俱忘」といっている。大森曹玄は「一刀流兵法五典」と「禅の五位」を照応させてそのあたりを説明している。二律相反を超越するということは生死を超越するということである。葉隠に「武士道とは死ぬこととみつけたり」というのもこのことである。古人が剣道の修練によって到達した奥義が死を超越し、自己を忘れ去って死一枚になりきり、大きな生として生きることにあつた。武道

とは、死を通じて大活を現成し、永遠の生命に生きる人生の一大事であると大森曹玄はいつている。剣道とは、自己を真実の人間として形成する心学道である。姿勢を正し、呼吸を正して心気力一致の境を、懸り稽古や立ち切り稽古で具体的に身体で学ぶべきものである。

1970 年第 1 回世界剣道選手権大会が日本で開かれた時、ヨーロッパ系の主だった役員が木村篤太郎全剣連会長のもとを訪れた。その時「自分たちは日本の古武士のような風格を身につけたいために剣道をやっているのだ」と述べたと書いてある（「剣と禅—むすび」）。先のヨーロッパ剣道連盟会長も、同様のことを発言し、「今の日本のように勝ち負けに拘った剣道をするなら、日本を剣道の宗主国とは認めない」と述べたと伝えられる。我々医師の剣道は勝ち負けに拘らない剣道が続けている唯一の団体かもしれない。私たちこそ本来の剣道の姿に最も近いといってよいであろう。会員一同の一層奮励努力あらんことを願う。

最後に、剣道に取り組む普段の姿勢について付記する。

剣道の稽古で立合っていて気持ちの良い相手とそうでないものがある。「竹刀を使った剣道であるから打たれても死にはしない」と考えるのかやたらと打ち合う剣道がある。真剣であれば打たれることは死ぬことと考えるとそうは打ちを出すことはできない。無駄打ちを戒めるのはそれ故である。「当たれば幸い」では剣道にならず、ただの竹刀遊びでしかない。お互いが生きる方法を求める剣道、すなわち気剣体一致に心がけ気を意識している人は気持ちのよい相手である。普段から呼吸法を訓練し、相手との気比べ・呼吸比で負けないことである。呼吸を乱した方が負けるに決まっているのだから急いで打つ必要はない。打つ技術より呼吸法をしっかり身につけるほうが剣道の上達は早いと思っている。呼吸のリズムによって打突の応酬が組み立てられ理合いに合った立合いが可能になる。

みなさんの追証を願い、主題とやや飛躍した内容となったことをお詫びして筆をおく。

参考書

「白隠禅師 夜船閑話」	伊豆山格堂	春秋社
「禅談」 澤木興道	大法輪閣	
「剣と禅」 大森曹玄	春秋社	
「剣禅話」 山岡鉄舟	徳間書房	
「脳を活性化する剣道」	湯村正仁	体育とスポーツ出版社



平成 17 年 NPO 国際社会人剣道クラブ全国例会（米子）
大会記念に作成した扇
「敵もなく我もなし、物来るに随って応じて跡なし」

剣道とアンチ・ドーピング



全日本剣道連盟アンチ・ドーピング委員会・委員長

宮坂 昌之

1. 剣道でドーピング検査が行われるのか？

ドーピングとは、競技力をあげるために不正な薬物や方法を用いる行為である。残念なことに、ドーピングは、オリンピックや種々の世界選手権では必ずと言っていいほど話題となり、違反者が後を絶たない。ドーピングには種々の方法があり、なかには競技者の反射速度や持続力などを向上させたり、怪我からの回復をスピードアップさせることなどを謳っているものがある。このために、どうしても勝ちたいと思う選手には大きな誘惑となりうる。しかし、このドーピングは、全日本剣道連盟の「剣道試合・審判規則第15条」において禁止行為として明確に規定され、世界剣道選手権大会、全日本剣道剣道選手権や国民体育大会などではドーピング検査が実際に行われている。

2. 「剣士のためのアンチ・ドーピングマニュアル」の作成

剣道では、これまでドーピング規則違反に問われたケースは無いが、他の武道では報告例があり、そのかなりはいわゆる「うっかりドーピング」(市販薬にはアンチ・ドーピング規定で禁止されている薬物成分が含まれるものがあり、このような薬を選手が知らずに服用してドーピング違反に問われること)である。しかし、プロスポーツでは、薬物や禁止されている方法を意図的に用いて競技力をあげようとする例が多々報告されている。一方、ドーピングには突然死、肝障害、腎障害をはじめとする種々の重篤な副作用があり、競技者の健康を大きく害する可能性があることから、社会的影響が大きく、特に青少年に与える影響は大である。

これらのことから、全剣連アンチ・ドーピング委員会は、特に青少年剣道の指導者を対象として「剣士のためのアンチ・ドーピングマニュアル」を作成した。作成にあたっては、本委員会委員の体育科学専門家の小澤聡、齋藤実、薬事専門家の亀尾一弥、



全日本剣道連盟

法律家の片岡義夫、医師の朝日茂樹、門野由紀子、宮坂昌之の計7名が初稿を提供し、会合を重ねてその内容について慎重に討議した。松永政美・全剣連前副会長もこの討議に何度も参加され、貴重なアドバイスをされた。ドーピングに負けない心や身体作りの部分の原稿についてはスポーツ栄養士の森聡子氏に執筆をお願いした。さらに、自らがドーピング検査を何度も受けた経験のある栄花直輝、寺本将司、村山千夏の3選手に自らの体験談とアンチ・ドーピングに関する心構えを書いて貰った。原稿の最終校閲は、医師で日本アンチ・ドーピング機構副会長である赤間高雄先生（早稲田大学教授）をお願いした。

このマニュアルでは、ドーピングに関する基本知識をわかりやすく提供することだけでなく、ドーピングの予防、すなわち、ドーピングに負けない心と体を作るためには何をしたらよいのか？について、平易に解説している。また、服用しようとするお薬が禁止物質なのかについて、インターネットや電話で知る方法についても掲載している。文章は短く、専門用語は避け、ほんのりとした可愛いイラストが用いられている。このイラストは、アンチ・ドーピング委員の一人である門野由紀子医師のご主人、門野政人・剣道教士八段が担当された。このマニュアルは、全剣連ホームページ中の「剣道におけるアンチ・ドーピング」の欄にPDFファイルとして掲載されており、どなたでもダウンロードして読むことができる。また全剣連オンラインショップからも入手できる。一人でも多くの医師、剣士の方々に読んでいただき、ドーピングに関する正しい知識と理解が広く普及していくことを願うものである。

3. 禁止されている薬物、危ない薬物はどこを調べたらよいのか？

比較的簡単な方法が三つある。一つは、インターネットで Global DRO (<http://www.globaldro.com/JP/search>)というサイトに入り、調べたい市販薬名を入れるとその薬剤に禁止物質が含まれているかどうか分かる。もう一つは、上記の全剣連ホームページからダウンロードできる「薬剤師のためのドーピング防止ガイドブック」を見ることである。この本には、薬局で販売されている薬について、禁止物質が入っているか、あるいは使用可能かが記載されている。最後は「スポーツファーマシスト」という看板がある薬局に問い合わせることである。これについては上記の「剣士のためのアンチ・ドーピングマニュアル」に詳しいことが記載されている。ただし、気を付けたいといけなは、これらの情報源は市販薬、病院で使われる医薬品が主なる対象となっていて、漢方薬やサプリメントに関する情報は含まれていないことである。それはこれらの製品の成分が明確に記載されていないからである（漢方薬についてはさらに下記参照）。使用可能なサプリメントについては、特定の会社の製品のみではあるが、日本アンチ・ドーピング機構ホームページにその一覧が掲載されているので、使用希望の方は参照されたい(<http://www.playtruejapan.org/qualified/>)。

4. 病気やけがで禁止物質を使うことができるのか？— TUE(治療使用特例)の存在。

選手が治療の目的で禁止薬物を用いざるを得ない場合には、「治療使用特例」(TUE)とよばれる書類を提出して公的な許可を得ることが必要である。TUEの書式は全日本アンチ・ドーピング機構のホームページからダウンロードでき、選手と医師による記入欄がある。TUEの事前申請が必要な国内競技会は、剣道では現在のところ全日本剣道選手権大会、全日本女子剣道選手権大会と国民体育大会である。TUEの申請先は日本アンチ・ドーピング機構(JADA)のTUE委員会で、TUEの承認の条件は、(1) 治療上使わざるを得ないこと(使用しないと健康上重大な障害を及ぼすことが予想される)。(2) 他に代えられる治療法がないこと。(3) 治療として使用した結果、健康状態に戻る以上に競技力を向上させないこと。(4) 治療の必要性が、以前のドーピング行為の結果生じたものではないこと、である。これらの条件が満たされれば、申請されたTUEは承認され、選手はその薬剤を使用することが出来る。なお、医師がTUEに所見、薬剤の使用理由などを記入する際には、念のため、全剣連ホームページからダウンロード可能な「医師のためのTUEガイドブック2017」を参照されることをお勧めする。

5. 注意すべき薬にはどんなものがあるか？

上にも述べたように、市販の薬には禁止物質を含むものがある。以下は、上記の「剣士のためのアンチ・ドーピングマニュアル」からの抜粋である。

・ 風邪薬

総合感冒薬には十分注意しましょう。禁止物質であるエフェドリンなどを含むことが多いからです。薬の外箱で成分をチェックしましょう。メチルエフェドリン、エフェドリン、麻黄(マオウ)等は禁止物質成分です。

・ 目薬、点鼻薬、塗り薬

目薬や点鼻薬の中には、血管を収縮させる薬物(興奮剤となる)や糖質コルチコイドなどの禁止物質が入っているものがありますが、これらを点眼、点鼻することは禁止されていません。従って、TUEの提出は不要です。アトピーや痔の治療に用いる糖質コルチコイド入りの塗り薬も使用可能です。

・ 発毛剤

以前は発毛剤に含まれるフィナステリドが禁止物質でしたが、現在は使ってもよくなりました。ただし、ひげや体毛用の発毛剤には、禁止物質であるテストステロン(男性ホルモン)を含むものがあります(例:ミクロゲンパスタ)。このようなものは使用できません。

- ・ 漢方薬

漢方薬にはたくさんの複雑な成分が含まれていて、すべての含有物質が明らかになっているわけではありません。漢方薬は生薬(しょうやく)を使うので、名前が同じでも製造会社、原料の産地、収穫の時期などで成分が違うことがあります。漢方薬の中には麻黄(マオウ)、ホミカ(ストリキニーネを含む)などの禁止物質を含むものがあります。従って、漢方薬を使用する場合には、チームドクターのチェックや、上記のスポーツファーマシストのアドバイスを受ける必要があります。漢方薬は使用しないほうが無難です。また、漢方薬で TUE を取得することは困難です。

6. 最後に

剣道に本当にドーピング検査が必要かという声もあるが、国際剣道連盟が世界アンチ・ドーピング規程を批准し、その結果、全日本剣道連盟の「剣道試合・審判規則第15条」でドーピングが禁止行為として明確に規定されている以上、これは言っても仕方のないことであろう。また、五輪メダリストの中でドーピング違反者が右上がりが増えていることは、スポーツ界において勝負至上主義がはびこるとともにドーピング汚染が進行中であることを示していると思われる。医師がスポーツ選手の診療にあたることは稀なことではなく、スポーツ選手から薬物に関するアドバイスを求められ、TUE の記入を求められる機会もこれからは次第に増加していくことが推測される。そのようなことから、全医剣連の先生方には是非上記の「剣士のためのアンチ・ドーピングマニュアル」をご入手いただき、ドーピング、アンチ・ドーピングについての知識をアップデートしていただければと願う次第である。

第 52 回全日本医師剣道大会（高知大会）を開催して

高知大会会長 谷木利勝

第 52 回全日本医師剣道大会「わざわざ行こう高知大会」が平成 29 年 4 月 8 日・9 日に高知県立武道館で開催され、盛会のうちに終了しましたので、その概要を報告いたします。

ふり返れば、約 5 年前の平成 24 年、今大会実行委員長の枝重恭一先生と大会会長の私が揃って 7 段に合格したのを機に、医師剣道大会を高知へ誘致しても良いのではと考え、本大会開催の運びとなりました。高知では昭和 47 年に第 7 回大会を開催してから、実に 45 年ぶりの大会となりました。

今回の大会は谷木、枝重と竹井薬局の竹井正生の 3 名で、約 2 年前から準備を始めました。枝重先生と私は、大会で披露する刀を用いての「日本剣道形」を 1 ヶ月に 1 回、剣道 8 段の先生のご指導の下、練習を重ねました。それまで剣道形に時間をかけて繰り返し習ったことは無かったのですが、剣道の理合いや奥深さを理解でき、大変勉強になりました。

昨今は製薬業界等が財政的に厳しくなり、業界からの資金援助をあまり多く期待できなくなったため、今回は大会参加費を 1 万 5 千円から 2 万円に増額しました。会費の値上げ、高知へのアクセスの不便さなどで、大会参加者が少なくなるのではと心配していましたが、医師剣道連盟名簿の会員約 450 名の中から、109 名もの参加がありました。

大会の開会式では鏡山博之全日本医師剣道連盟会長、尾崎正直高知県知事、渡辺三則高知県剣道連盟会長、岡林弘毅高知県医師会会長にご祝辞をいただきました。

一般の方から、医師剣道大会では何をするのですかと、よく尋ねられます。本大会は医師剣道選手権試合ではなくて、4 人 1 組がグループとなって、1 人が 2 回対戦して審査委員が段位取得の可否を決める剣道昇段試験を模した試合と、東西対抗の 2 組に分けて戦う試合が主になっています。その他には地域対抗の団体戦もあり、会員同士の親睦が主体です。と答えています。

普通の稽古会ではよく行われるのですが、医師剣道大会では取り入れていなかった廻り稽古を、今回は取り入れることにしました。その理由は、自由稽古では互いに好みで選んだ相手と稽古をし、対抗戦などでは年齢が近い人と当たることが多いため、対戦相手が毎年ほぼ決まっています。従って誰と対戦するかがわからず、いろいろな人と立ち合える廻り稽古が良いのではと思ったからです。6 段以上の約 60 名を 2 組に、5 段以下の約 30 名を 1 組に分けて、計 3 組で廻り稽古をしました。1 人 2 分、5 人対戦の後で小休憩、その後 5 人と対戦で、

計 10 人と稽古するようにしました。たくさんの方と稽古できてよかったと自賛しています。

大会初日の夜には、参加者の奥様方や高知県剣道連盟の方々も加わって、大宴会が開催されました。高知流のおもてなしで、宴席には高知産の各種お酒、鰹のたたき、赤牛などが供され、定番の「よさこい踊り」も楽しんでいただきました。記念品は高知独特の杯（さかずき）——「可杯（べくはい）」にしました。大変好評であったようです。

また本大会記念の面タオルには、私が座右の銘にしている「心外無刀」という言葉を書かせていただきました。これは山岡鉄周の居合の極意です。無刀とは、心の外に刀が無いこと、敵と相對するとき、刀に拠ることなく心を以って心を打つ、ことを言います。刀を鞘に収める際、心に揺らぎがあれば自らの左手を切り込んでしまう。刀を抜くことなく相手を制し、さらに和合へ導く道と解説されたりもします。この言葉は、我々が医療者として患者さんに対峙するとき目指したい、「心を打つ医療」につながっていると思います。

大会の閉会式では例年に倣って 8 段の先生方に選抜していただき、優秀選手 10 名を表彰しました。そして最後には次期第 53 回大会会長、岩手の菅義行先生にご挨拶いただきました。

最後になりましたが、前回大会実行委員長の林明人先生、医師剣道連盟事務局の西本孝先生には、とりわけお世話になりました。また、今大会のために準備を進めてくれた事務局の皆さん、本大会のためにご尽力くださり、大会の運営にご支援・ご協力いただいた高知県剣道連盟を始め関係者の方々に、深く感謝申し上げます。



第52回 全日本医師剣道大会 高知大会平成29年4月8日～9日高知県立武道館

関東医歯薬獣医科大学剣道連盟

創立 60 周年記念大会を迎えて

関東医歯薬獣医科大学剣道連盟会長 荻原幸彦

関東地方の大学で学んだ先生方にとって、この呼称は懐かしい響きと思われるます。自分たちを育て鍛え上げた大会で、あの時を思い出せば再び熱き血潮がめぐり始めることと拝察いたします。平成 17 年に本連盟がめでたく還暦を迎えるにあたって記念大会開催を計画し、この度秋季大会の後半を「連盟創立 60 周年記念大会」として開催することができました。これは偏に 40 校に及ぶ加盟大学の学生諸君と OB 諸先生方からの惜しみないご協力、そして毎回審判をお願いしております警視庁剣道指導室の先生方の適切かつ厳格なるご指導の賜物と、連盟役員一同深謝あるのみと首を垂れるばかりです。

さて、長々と謝辞を連ねてきましたが、本連盟をご存知のない先生方も多いかと思われるので、連盟の略歴と概要をお話しさせていただきます。

まずは略歴ですが、本連盟の筆頭顧問伊藤元明先生の玉稿によりますと第二次世界大戦前より「東京医歯薬リーグ」と称して医歯薬交流剣道大会が既に開催されていたようです。戦後の昭和 32 年に東京医科大・日本医科大・東京歯科大・日本歯科大の 4 校の OB・学生によって「東京医歯薬剣道連盟」が発足、東京都剣道連盟への加入を経て第一回剣道大会が開催されたとのことです。その後連盟は急速に拡大して昭和 37 年には「関東医歯薬剣道連盟」と名称変更、昭和 50 年には連盟創立の翌年より加盟している麻布獣医科大学（現麻布大学獣医学部）が抜けているとして「関東医歯薬獣剣道連盟」、創立 30 周年の昭和 61 年には名称見直しで「関東医歯薬獣医科大学剣道連盟」と現称に至りました。

続いて概要ですが、連盟規約に“本連盟は関東地区に存在する医科大学、歯科大学、薬科大学、獣医科大学、大学医学部、大学歯学部、大学薬学部、大学獣医学部の学生及び卒業生をもって組織する。原則として医師国家試験、歯科医師国家試験、薬剤師国家試験、獣医師国家試験の受験資格を有する学部、学科とする。”と参加資格を規定しています。大会は春季・秋季の年 2 回開催され、春は新人団体戦と段別個人戦、秋は女子団体戦と団体戦が行われます。運営は私達 OB 役員と各加盟校の学生理事による年 2 回の定例理事会で決議されています。OB 役員はあくまでサポートで、学生理事主体の運営となるように会議は進められています。主管校は“あいうえお”順に持ち回りで、現在は副主管校 2

校も持ち回りとして、バックアップ体制をとるようになりました。

このような体制で連盟を維持し、大会を開催してきたことは非常に誇らしいものであると自他共に認めざるを得ません。したがって、この度の60周年は本連盟の通過点であって、今後も連盟活動が永続されていくことを心から祈念しています。

それでは第60回秋季大会の式次第をご紹介します。10年前に「創立50周年記念大会」を大々的に開催いたしました関係上、今回はできる限りコンパクトにまとめた内容となっています。朝の大会開会式終了後に、午前中は「秋季大会の部」として女子団体戦と団体戦が決勝まで行われ、表彰式となりました。ちなみに今大会の優勝校ですが女子団体戦は防衛医科大学校が初優勝、団体戦は自治医科大学が栄誉を獲得いたしました午後から「連盟創立60周年記念大会」で、OBの石濱英暢先生と荻原幸彦による日本剣道形、警視庁剣道指導室の佐藤勝信

先生と石井猛先生による警視流木立形に始まりました。続いてOBの拝見試合が4試合、越智小枝先生 vs 高梨裕子先生、相川純輝先生 vs 胡谷俊樹先生、西郡秀文先生 vs 伊藤伸先生、福島孝行先生 vs 林明人先生という組み合わせで行われました。最後に各校代表による男女混合8チームによる団体戦が、通常とは異なる和やかな雰囲気の下に行われ終了となりました。終了後にはささやかながら記念式典も開催されました。



ねんりんピック秋田 2017 に参加して

ハートライフ病院外科

奥島憲彦

沖縄県剣道連盟から「ねんりんピック秋田 2017」に沖縄県代表(5人)として参加しないかという有難いお話がありました。沖縄県では毎年、60歳以上の東西対抗試合を「ねんりんピック沖縄」として行っており、前年度の試合を参考に剣道連盟が派遣選手を決定しています。

県によっては毎年、代表決定戦を行って決定している県もあるようです。「ねんりんピック」は健康長寿を目指して厚生労働省が主催して毎年、各県持ち回りで60歳以上の選手が参加して各種競技が行われるミニ国体のようなものです。「終始団体行動で、個人行動や離団は許さない」という注意がありました。そこで同僚やスタッフ、患者さんをお願いし土、日を含め5泊6日の休みをなんとかとることができました。沖縄県剣道連盟からは県立武道館の稽古の前に会員の前で壮行会と激励金を頂戴しました。県によっても競技によっても補助金が異なるようですが、今回、私は総費用の半額が自己負担でした。

沖縄選手団は総勢110人、おそろいのジャージ姿で那覇空港を出発しました。新聞社やテレビの取材がきていました。1日目は全員、男鹿温泉に宿泊し「なまはげ」などの秋田の伝統芸能を堪能すると同時に選手団の団結を図りました。剣道、テニス、卓球、ソフトボール、マラソン、ダンスなどなじみの種目以外にゲートボール、グランドゴルフ、ペタンクなど高齢者に人気の種目、さらには囲碁、将棋の選手も参加しておりました。沖縄県の最年長選手は86歳のゲートボールの選手で大変お元気で、明るくお酒も強く健康長寿のお手本のような方でした。

9月9日は秋田市の陸上競技場で総合開会式があり全国から参加した1万人余の選手団が皇族、鈴木大地スポーツ庁長官、厚生労働省副大臣、県知事など列席のもと行進を行いました。沖縄県は「ランの花」を右手に掲げて観客の前を行進しました。オリンピックレスリングの金メダリストが聖火をもって走ってきて聖火台に火をともしました。グランドでは秋田の四季のマスゲームや秋田の祭り(竿灯祭)が繰り広げられながらミニ国体、ミニオリンピックの様相でした。会場で熊本県代表で熊大の2年後輩の石丸隆久君(建築家)と会い、互いの健闘を誓い合いました。

その後、バスで長時間移動し、由利本荘市で剣道は行われました。剣道は7段以下の参加で大将が70歳以上、副将が65歳以上、後は60歳以上で年齢の若い順に先鋒から並べる決まりです。私は沖縄県チームの中堅でメンバー中3人は警察で長年鍛えた先生方で国体など県代表の経験の豊富な先生方でした。5

人全員が7段、教士でした。期間中、5人は同室で寝泊まりし、食事も共にし、終始団体行動でした。剣道の稽古はついていくのがやっとでした。夕食後は「さあ、寝ようか」と思うと、それから每晚飲み会があり、皆さんお酒が強く、大学生時代の合宿を思い出しました。おかげでお酒の全く飲めない私も酒をつぐのが上手になりました。しかし、剣道に関して大変貴重な体験談などがうかがえ楽しいひと時を過ごすことができました。大会には各県と政令指定都市など全国から70チームが参加しました。4チームのリーグ戦で2試合を行い、1チームが決勝トーナメントにすみました。医師では札幌市の代表で池澤清豪先生（整形外科医、東京医大卒、教士7段）も参加されていました。沖縄県は初戦は新潟県と戦いました。私は引き分けで、チームは1対2で負けました。2試合目は徳島県で私は2本負けでチームは2対1で勝利しました。3チームが1勝1敗でなりましたが、結局、徳島県に負けた新潟県が本数の差で決勝に進出しました。私は1本も取れずにチームに貢献できず、かえって足をひっぱってしまって大変申し訳ない思いをしました。久しぶりの試合で私としては必死に戦いましたが、「1本取られないようにしよう」という消極的な考えが途中で頭をもたげ、「何が何でも1本取る、リスクをおかしても1本とりにいく」という気迫に欠けていたと反省しました。身を捨てて打ち込む勇気が足りなかったと思いました。仕事柄、週1回程度、数人で30分の基本稽古のみの稽古をこの数年間行ってきましたが「初太刀の1本は必ずとる」という厳しい稽古ができていなかったと思いました。また、県立武道館の稽古にもほとんど参加できておらず、高段者の先生に稽古をお願いし「氣をいただく稽古」が足りなかったと思いました。これらの反省を今後の稽古の際の励みにしたいと考えています。今回、ねんりんピック秋田2017に参加して70歳代でも元気に試合をされている先輩方の姿を拝見し、剣道の良さを改めて認識すると同時に、自分も「生涯剣道」を実践していきたいと強く感じました。また、剣道のおかげで沖縄県からはめったに行く機会のない秋田県の観光も楽しむことができました。沖縄県では2年連続の選手としての参加はできないようです。ねんりんピック2018年は富山県、2019年は和歌山県で開催されます。

是非、60歳以上の医師剣友の皆様は奮ってご参加ください。



写真1 沖縄県チーム

写真2 由利本荘市体育館



写真3
1万人選手団が参加した開会式

剣道 7 段合格記

新潟 中村茂樹



2016 年 11 月東京都武道館で、剣道 7 段に合格させて頂きました。60 才 3 回目の受審でした。あれから 1 年経ち、本会屈指の剣士 林明人先生から、合格記を書くようご連絡頂きました。来し方を総括し、また今後の決心をする目的でお受けしました。

私は父に勧められ、小学 3 年で新潟田市剣道連盟の稽古に通い始めました。そこで故 佐藤毅範士（写真 1）にご指導いただいたことが、大げさでなく、私の人生を決定づけました。先生は京都武専のご卒業で、子供たちには常に正しい基本動作と元気一杯かかることを求められ、一緒に汗をかいて指導をして下さいました。また遠来の高段者や選手に対しては、圧倒的な品位風格を示されていました。何事にも正しい基本と日々の精進との両方が大切なこと、またいつも大らかさを忘れないことを、先生から教わったと思います。中学校のとき県大会で団体優勝した以外、私には特筆すべき戦績はありません。しかし至高の師に学んだことが、唯一の自慢であり、私の人生の背骨です。

医師になり仕事や家庭の忙しさで、何度か剣道を中断しました。40 歳頃ほぼ 20 年ぶりに出た試合で、ある若い剣士にしたたかに打たれ、何か月か完敗の悔しさを引きずりました。しかしこの経験が「剣道をもう一度、勉強し直そう」と思うきっかけになりました。ときには正しく打たれることも大切です。後で知ったことですが、彼は国際武道大学の卒業生で当時 27 歳 5 段、強いわけです。あれから 20 年、今ではある会で定期的に彼と顔を合わせて、とくに 7 段になった彼から、美しく強く謙虚な剣道を勉強させてもらっています。

6 段審査は 2 回不合格になり、自分には根本的な未熟さがあるのか、と迷いました。3 回目名古屋では前泊して、心を整えました。打ったことのない返し胴が決まり、合格しました。7 段の受審資格ができた 58, 59 才には、肘や肩の入院手術、腰痛、実弟の病気と逝去など、次々試練が続き受審を見送りました。

2016 年 60 才の正月から毎朝、素振りとジョギングのひとり稽古を開始しました。いずれも若い時の 10 分の 1 以下しかできなくなっていました。これがかえって幸いして、毎朝継続できました。またこのころより、「圧倒的な高みから自分を導いて下さる師に出会いたい」と自然に思い始めました。

3 月に第 51 回大会（大柵廣伸 大会会長、林明人 実行委員長）が剣道のメッ

カ茨城県で開催されました。有名選手や 8 段の先生方による模範拝見試合の後の指導稽古で、初対面の中里誠範士（茨城）の列に並びました。ところが、体が金縛りにあったようになり打てません。打とうとする心を見透かされるように「まだ」「まだまだ・・・」わずか 1 分間に、1 本も発することなくヘトヘトになってしまいました。これは大変な先生に出会ってしまったと思い、あらためてご挨拶したところ、「いつでも尋ねて来て下さい」と穏やかに答えて下さいました。以後折に触れ、ご指導を頂いています。世阿弥や武蔵やボクシングの村田選手まで広い話題に一貫する「気」と「肚」のお話、丹田呼吸、そして一刀流の木刀を用いた独創的な形稽古が中心です。目から鱗が落ちるように自分の剣道観が変わり、周りからも「剣道が変わってきたね」と言ってもらえるようになりました。

それでも 5 月京都の審査では、張り切り過ぎて無駄打ちを連発してしまいました。2 人目を終えてアリーナを出ると無力感で涙が溢れ出て、まだ発表前なのにと、連れの家内に呆れられました。8 月富山も、まだ 1 本を出すまでの覚悟が足りず不合格でした。中里範士に報告すると「不合格も合格も、等しく修行の一過程と捉えるように」と言われ、気持ちがしゃんとしました。相変わらず早朝のひとり稽古を続け、11 月東京の審査を迎えました。1 人目の相手は 1m80 cm 以上の長身で、眼光鋭く着装もぴしりと決まって、所作に余裕さえ感じました。きっと警察の特練 OB に違いないと思いましたが、「自分だって頑張ってきたんじゃないか」と開き直って肚に力を入れると、無心の打突が出ました。2 人目はもう、覚えていません。

合格発表で自分の番号を見つけても意外に冷静で、すでに形審査に気持ちが集中していました。東京武道館を出る頃には辺りがすっかり暗くなっていましたが、この景色を忘れまいと帰路につきました。

紙面の都合で詳細を書けませんが、合格は県内県外の多くの先生方のご指導のお蔭様です。とくに 8 段や範士の先生方は、別格の「観の目」をもっておられます。強い相手、若い相手にもまったく自然体で、気攻めで迫る。この気位を目標に、今後も修行を続けていくつもりです。

また一開業医としても、日頃の準備を良くして背筋を伸ばし、肚呼吸を心掛けていると、患者さんやスタッフと息が合い、良い診療ができるようです。大衲先生の提唱された「医剣一如」にも、通じるものがあるかと思っています。

最後に先輩から頂いた助言のなかで、とくに心に響いたものがあります。「7 段ともなれば、いつも他人が見ていると思え。竹刀の持ち方から足の踏み方、稽古の品格、着装、言葉使い・・・全部だ」。私の場合、誰から見ても「うん、7 段だね」と言って頂けるようになるには、まだまだ修業不足です。これから好きな剣道を少しでも長く続けて、さらに向上したいと思います。

追記

これを書いている 2017 年 10 月、第 65 回 新潟県剣道大会があり、幸運にも個人戦 60 才代の部で優勝させて頂きました。また個人戦 50 才代の部では本会の高橋栄一先生（新潟市）が優勝されました（写真 2）。「お医者さんたち、頑張るねえ」と県剣連役員の先生方がおっしゃっていました。



写真 1 恩師 佐藤毅範士



写真 2
左から筆者、
高橋先生、
剣友 町田氏

事務局からのお知らせ

- 1) 2017 年 4 月の高知大会で、大祢廣伸新会長が就任したのに伴い、事務局が変更となりました。詳細は全医剣連ホームページ(<http://japan-medical-kendo.jp>)にて確認下さい。

全日本医師剣道連盟事務局

〒305-0044 茨城県つくば市並木 3-23-25 林明人

Tel & Fax: 029-855-7446

専用メールアドレス: info@japan-medical-kendo.jp

住所・段位・称号の変更などのお知らせは次のページの用紙をご使用する
か、上記のメールアドレスでご連絡下さい。

- 2) **年会費(1 万円)**を会員各自、下記銀行にお振り込みの程、よろしくお願い
します。事務局の変更に伴い、銀行口座も変更となっておりますので、
ご注意下さい。

みずほ銀行・新浦安支店(342)

普通口座 1984793

全日本医師剣道連盟

(ゼンニホンイシケンドウレンメイ)

- 3) ご寄付にご賛同の会員の先生は、年会費に追加して上記銀行口座にお振
り込み下さい。
- 4) 新しい銀行口座に変更時点(平成 29 年 6 月)での繰越金は、332 万円 で
す。この時点ですでにいわて北上大会には前事務局から 60 万円の振り込み
は終了しております。平成 29 年 6 月以降の会計報告につきましては、次回
ご報告いたします。

編集後記

全日本医師剣道連盟会長が鏡山博行先生から大柰廣伸先生にバトンタッチされました。それに伴い、全医剣連事務局も西本孝先生から林明人に交代しました。連盟報も新しい事務局での初めての発行となります。

今回は、菅義行先生から岩手県北上市で開催されます第53回いわて北上大会のご案内を、谷木利勝先生から高知大会、さらに荻原幸彦先生から関東医師薬獣医科大学剣道連盟創立60周年記念大会のご報告をいただきました。

特別寄稿といたしまして、第52回大会茨城大会で90歳以上の部門での模範試合を新井先生とともにお願いしました95歳になられる高崎慶男先生に「生涯剣道」をテーマにして玉稿をいただきました。高崎先生と新井先生の模範試合は会員や八段の先生方をはじめ、みる者すべての心を大きく揺さぶる感動的な模範試合でした。高崎慶男範士の生涯剣道を何度も読み返していただければ幸いです。

また、会員の先生方に原稿をお願いいたしましたところ、皆様のご快諾をすぐさまいただきました。湯村正仁先生には合気ではなく相気という言葉で「相気と呼吸法」をテーマで、全剣連のアンチ・ドーピング委員長を担当されている宮坂昌之先生に「剣道とアンチ・ドーピング」を、沖縄の奥島憲彦先生に「ねんりんピックに参加して」を、新潟の中村茂樹先生には「七段合格記」をご執筆いただきました。剣道を愛する皆様の心が伝わる文面です。あらためて、深く御礼申し上げます。

編集 林 明人

幹事会メンバー

(平成30年1月現在、敬称略)

朝日茂樹、飯塚幹雄、石井靖隆、伊藤保憲、稲村征夫、今村幹雄、枝重恭一、大柰廣伸、奥島憲彦、鏡山博行、加野資典、菅 義行、新藤 寛、十河勝正、谷木利勝、中島 進、長野拓三、中山尚夫、野見山延、濱 弘樹、林 明人、日高久光、堀江 貴、箕田修治、宮坂信之、宮坂昌之、森 能史、守 正美、萬木信人、諸木浩一、山本晋一郎、湯村正仁、吉村了勇



画：村嶋恒徳

